

前方後円墳の築造停止とその背景：北部九州を中心に

辻田，淳一郎
九州大学大学院人文科学研究院歴史学部門：准教授

<https://doi.org/10.15017/6781029>

出版情報：史淵. 160, pp.55-92, 2023-03-14. Graduate School of Humanities, Faculty of Humanities, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

前方後円墳の築造停止とその背景

— 北部九州を中心に —

辻 田 淳一郎

1. はじめに

日本列島の古墳時代は前方後円墳の築造を以て特徴付けられるが、6世紀後半から7世紀にかけてその築造が停止する。西日本では多くの地域において6世紀後半のTK43型式期には築造が停止するのに対し、東日本では7世紀初頭～前半まで築造が継続する地域もみられる。また築造停止のあり方も多様であり、墳丘規模が縮小しながら終了する場合もあれば、墳丘が大規模化して終了した後、大型の円墳や方墳の築造へと転換する場合もある。こうした前方後円墳の築造停止は、6世紀中葉以降のいわゆるミヤケ制・国造制・部民制の各地における展開と時期的には重なっており、そうした動向とどのように関連するのかも課題といえる。具体的には、6世紀後半の各地での大型前方後円墳の築造について「国造級」といった位置づけがなされ、地域の代表者と位置づけられる例も少なくない。本稿で対象として扱う北部九州では、後の令制国の「筑前」・「筑後」にあたる地域をはじめとした各地において、律令期の郡単位に近いほどの範囲で後期に前方後円墳が築造される場合が多く、それら相互の関係性についても課題である。また北部九州では、「筑紫君磐井の乱」(527-528)の後に各地にミヤケが設置されたとされ、福岡平野周辺においては具体的にミヤケ関連遺跡が検出されていることから、それらとの関連が明らかになることも期待される。本稿は、以上のような観点から、前方後円墳の築造停止とその歴史的背景について、北部九州地域を対象として検討するものである。

2. 研究史と問題の所在

(1) 前方後円墳の築造停止に関する諸問題

ここでは、前方後円墳の築造停止および関連する諸問題についての研究史を概観する。前方後円墳の終焉については、各地における築造停止の時期および終末期古墳への転換という観点から検討が行われてきた。大枠としては、規模や形態の違いを持ちながら古墳時代を通して前方後円墳の築造が継続することについて、「部族連合」「擬制的同祖同族関係」（近藤1983）あるいは「前方後円墳体制」（都出1991）といった立場の違いを伴いつつも、後期後半に築造が停止した後、それが終末期古墳へと転換していく過程として理解されている。近畿地域においては、6世紀後半の奈良県五条野丸山古墳や平田梅山古墳などが最後の前方後円墳として知られ、その後築造される大型方墳が蘇我系、大型円墳が非蘇我系の有力者の墳墓として築かれるものと想定されている（白石1982；土生田1999；高橋2004；岸本2011）。1984年には『古代学研究』誌上で特集が組まれ、西日本・東日本の「各地域における最後の前方後円墳」が抽出された。その結果、西日本では前述のように6世紀後葉のTK43型式期、東日本でも多くの地域において6世紀末～7世紀初頭前後に前方後円墳の築造が停止することが明らかにされている（古代学研究会編1984a・b・c・d・e）。その成果を踏まえた議論の中では、各地域におけるいわゆる首長墓の系譜の中で比較的大型の前方後円墳が築かれる場合と、群集墳中に、その築造の嚆矢として小型の前方後円墳が築かれる場合の両者があることが指摘されている（森他1984）。辰巳和弘氏は、後者の小型前方後円墳に関して、氏（族）の始祖といった解釈を示すとともに、群集墳で前方後円墳をもつものともたないものの両者が存在することを指摘している（同討論中の発言）。その後、埋蔵文化財研究会（1998）の『前方後円墳の終焉』によって各地の資料が集成され、前後の時期も含めた前方後円墳築造停止の過程が広く検討されている。

また都出比呂志氏は、後期後半から終末期にかけて、各地の「首長系譜」において古墳の築造から古代寺院の造営へと転換するあり方を想定している（都

出1988)。西日本については、こうした都出氏の議論を継承しつつ、福永伸哉氏、杉井健氏、松木武彦氏、北條芳隆氏、高橋照彦氏、清家章氏らにより、各地の前方後円墳築造停止に関する比較研究が行われている（福永編2004）。この中では、中期後半から後期前半（5世紀後半から6世紀前半）にかけて、前方後円墳の築造が衰退する地域と逆に盛行する地域という両パターンがあることが共通理解として示されており、その上で後期後半に少数の前方後円墳が大型化し、消滅することが近畿地域の古墳築造動向と密接に結びついた現象であることが指摘されている。

他方で、後期古墳の被葬者像については、副葬品の組合せと階層性といった点から議論が行われてきた（新納1983）。これに関連して、大型前方後円墳の築造と装飾付大刀からみた地域の統合といった点についても地域間の比較検討が行われ、山陰地域のように大型前方後円墳を上位として地域の統合が進み装飾付大刀が副葬される場合と、そうした統合が明瞭でない場合など、地域によって異なる様相が存在することが明らかにされている（松尾2005）。特に山陰地域に関しては、後期・終末期から律令制下における行政単位の区分や交通の整備といった検討が進められている（島根県古代文化センター編2019・2022）。

こうした議論の背後には、文献史学におけるミヤケ制・国造制・部民制に関する研究の進展とそれらとの接続という課題がある（石母田1971；吉田1973；山尾1977；館野1978・1999・2004・2012；笹川1985・2021；篠川1985・1996・2021；八木1986；鎌田2001；仁藤2009；大川原2009・2017；森2014；篠川他編2017など）。特に、地方における国造制やミヤケ制に関して、「磐井の乱」や「武蔵国造の乱」を契機として成立するといった議論（館野1978；篠川1985・1996）は、各地における後期後半における古墳被葬者層の理解に大きな影響を与えてきた。

上述のように、関東など東日本の一部ではTK217型式期まで築造が継続する地域もみられ、その点に注目した検討も行われてきた（白石1991；広瀬・太田2011）。北関東周辺では、斎藤忠氏（1958）や甘粕健氏（1970）の古墳被葬者と国造に関する先駆的研究をはじめとして、「武蔵国造の乱」（534）後における「上毛野」地域の勢力解体や国造制成立などと関連づけて後期後半以降の前方後

円墳の築造停止から大型方墳への転換が説明される場合も多い（白石2007；土生田2008；右島1994・2011；城倉2011；若狭2016・2021）。

また未報告資料の整理・検討が行われた静岡県賤機山古墳と千葉県金鈴塚古墳については、それぞれ多数の研究者による共同研究として成果が刊行されている。賤機山古墳については、後述するように、後期後半に築造された独立円墳において、近畿地域と密接な結びつきを持った被葬者が埋葬されたこと、副葬品の内容から地域的に最上位と位置づけられることなどが、ミヤケの設置や国造制の問題などと重ねつつ議論されている（鈴木・田村編2019）。金鈴塚古墳については、TK209型式期に築造された最後の前方後円墳において、飛鳥Ⅲ期の時期まで継続的に追葬が行われるあり方が復元され、6世紀末の初代被葬者が馬来田国造であった可能性などが議論されている（上野編2022）。千葉県龍角寺古墳群と印波国造に関して進められている共同研究も、同様の問題意識の下、検討が行われている事例である（白井2016；川尻2022；城倉2022）。

以上のように、各地における前方後円墳の終焉については、築造停止時期と地域における統合のあり方、ミヤケ制・国造制・部民制との関連、終末期古墳や寺院築造への転換といった点が論点となってきたといえる。その上で、各地域における統合の実態や終末期への転換のあり方が、それぞれの地域の資料状況に即して検討されており、地域的な特色と差異が明らかとなっている。以下、北部九州の研究動向について概観する。

(2) 北部九州における前方後円墳の築造停止と背景

本稿で主な対象とする北部九州については、『前方後円墳集成』（近藤編1992）などをはじめとして、各地における古墳の年代観と築造動向の検討が進められてきた。その中でも特に、柳沢一男氏（1992）・重藤輝行氏（2007・2010・2011）による福岡県内の首長墓系譜の検討をはじめ、九州前方後円墳研究会による『後期古墳の再検討』（2008）、『終末期古墳の再検討』（2009）、『九州における首長墓系譜の再検討』（2010）により、九州各地における古墳築造動向や年代観が整理されたことが研究の基礎をなしている。

下原幸裕氏による『西日本の終末期古墳』では、各地の後期後半から終末期における大型墳・群集墳の年代の変遷が整理され、各地における国造級の被葬者像といったあり方が議論されている（下原2006）。そこでは、各地の前方後円墳の終焉から大型方墳・円墳への転換が、近畿地域におけるそれと時期的にも概ね連動していることが確認されている。前方後円墳の築造停止という点では、「六世紀第三四半期→六世紀第四四半期⇒七世紀第一四半期」という変遷で考えた場合に、①類：前方後円墳→前方後円墳⇒方墳、②類：前方後円墳→前方後円墳⇒円墳、③類：前方後円墳→円墳⇒方墳、④類：前方後円墳→円墳⇒円墳という大きく4つの類型化が可能であることを指摘し、天皇陵も含めて①類が最も基本となる変遷とした。終末期の首長墳の変遷については、A型：方墳のみで変遷する（対馬）、B型：変遷の過程のある段階で方墳が採用される（豊前の京都平野）、C型：円墳のみで変遷する（宗像地域）の3つに区分し、このうちB型が最も多く終末期方墳に政治的な意味がつよいことを指摘している。また先行研究の成果を整理しながら、6世紀後半～7世紀前半の古墳に注目しつつ、各地の「国造」に該当する古墳の具体的な比定なども行っている。氏の研究は、以下にみるような、北部九州でミヤケ研究が活発化する以前に刊行されており、そうした脈絡の議論があまり含まれていないが、いわゆる首長墓のみならず、群集墳まで含めて西日本全体にわたって検討された成果として重要であり、今後具体的に検証が行われる必要があるものと考えられる。

一方、須恵器生産やミヤケ制、地域編成といった観点での議論も行われている。岡田裕之氏は、北部九州における須恵器生産と窯跡の時期的変遷を整理しつつ、6世紀中葉以降に各地で拠点的な須恵器生産が行われ、地域編成が進展することを明らかにしている（岡田2003・2006・2007）。特に福岡県牛頸窯跡群については、那津官家の修造と関連するという理解が一般化している（渡邊1994；岡田2003；桃崎2010；石木2019；上田2022など）。6世紀中葉以降の須恵器生産をはじめとした各種生産の活発化は、ミヤケの設置とともに列島各地で広く認められるものであり、国家形成という点でも大きな画期をなすものと考えられている（熊谷2001；岩永2003；吉田2005；菱田2007）。

北部九州では、那津官家との関連が想定される福岡市比恵遺跡群・有田遺跡群をはじめ、磐井の乱後に各地に設置されたミヤケとそれに関連する遺跡についての研究が進んできた（例：柳沢1987・2014；板楠1991；米倉1993・2003；菅波1996・2012・2013；小田2003；甲斐2004；桃崎2010・2012；岩永2012・2014・2022；上田2022；辻田2012・2013など）。これに関連して、大型横穴式石室および終末期群集墳の変遷を検討した田村悟氏は、北部九州における「屯倉」の比定地と主要古墳の関係をみた場合、「いずれも6世紀後半代の際だった前方後円墳や、7世紀前半代の巨石を持つ大型の横穴式石室墳の分布が比較的少ない地域である」こと、また「「屯倉」比定地における上記のような有力古墳の希薄さに比べ、「君」「臣」「直」姓の有力豪族の所在が推定される地域では、6世紀末葉近くまで大型の前方後円墳を造営しており、7世紀前半代になっても有力な巨石墳が造営される箇所が多い」ことを指摘している（田村2009）。田村氏は後者の事例として、福岡県の宗像地域（「胸肩君」）、筑後川中流域（「的臣」）、八女古墳群（「筑紫君」）、長崎県壱岐古墳群（「壱岐直」）、熊本県野津古墳群（「火君」）などを挙げている。その上で田村氏は、那津官家を核とした博多湾沿岸地域や、各地に配置された「屯倉」は、「薄葬化」という意味での造墓規制の中心とする理解を示している。

また桃崎祐輔氏は、九州におけるミヤケの考古学的検討を行い、各地における具体的なミヤケ関連遺跡を抽出している（桃崎2010・2012・2019）。桃崎氏はこの中で、前方後円墳の築造停止に関して、以下の2つのパターンに整理している。すなわち、①在地首長系譜とは系譜を異にし、それらを凌駕する大規模首長墳が突然出現し、外来勢力の派遣が考えられる場合、②在地首長系譜に連なる大型前方後円墳の築造が停止し、大型～中型円墳や方墳に転換し、むしろ地域大首長よりも相対的に階層が低下する場合の両者である。①については、「磐井乱後の筑紫や武蔵国造反乱後の毛野にみられ、物部・大伴などの中央氏族や、その係累が強い権限を持って進駐し、戒厳令か軍管区制のような状況下で、在来の首長を監視・統括している様」を想定し、②については、「若狭や武蔵にみられ、在地首長が王権への従属度を強めた場合と、在地首長の旧領域にあら

たに官僚的首長が入植した場合」が考えられると指摘している(桃崎2010)。田村氏の見解と比較して、中央氏族や官僚的首長の新たな入植といった点を重視する理解が注目される。

筆者もまた、磐井の乱前後の北部九州地域の古墳築造動向を検討する中で、ミヤケの設置と装飾付大刀などの副葬品からみた地域社会のあり方を検討したことがある。特に福岡市比恵遺跡群や有田遺跡群の検討の結果、これらの遺跡の周辺において、5世紀代に遺構数が大幅に減少した後、TK10型式段階を画期として周辺がいわば「再開発」され、生産・開発の拡大に伴い集落域で生産集団が編成されたものと想定した。これは、ミヤケの造営に際して、例えば在地の集落などが「強制退去」のような形で取り除かれるといったあり方でなく、一部で土器の廃棄などが執り行われつつも、集落などとしては利用されていなかった土地に6世紀代に新たに大型倉庫群などが営まれるあり方を示したものである(辻田2013)。同様の6世紀代における「再開発」は、大分平野周辺でも確認されている(長2022)。この点を踏まえ、筆者は、6世紀中葉以降をミヤケを媒介とした間接支配が行われた時期、国造制・部民制の展開期と捉えつつ、北部九州においては地域差が顕著であることから、大きく2つの類型として整理した。すなわち、A：大型前方後円墳が不在である福岡平野周辺(那津官家)でのあり方は、そうした部民制に関わる生産の拡大と集団の編成が体系的に推進される状況が考古学的に観察可能な事例と考えられる一方で、B：前方後円墳が大型化し、前段階以来の氏族的秩序の中での生産組織の編成と支配とがより顕著に展開する地域(北部九州では宗像・八女・筑後川流域などを想定)が多く存在しており、この両者の併存がこの時期における国造制・部民制の地域的展開の実態であるものと捉えた(辻田2012)。この理解は、部民制のあり方とその背景について、A・B両類型という形でミヤケの観点から説明を試みたものであるが、現象の整理自体は先の田村氏の理解とほぼ共通するものである。この両者の違いが、部民制のあり方の違いなどどのように関連するかといった点については、他地域との比較も踏まえつつ、成立した政治組織の構造の類型として示す必要性が指摘されている(岩永2022)。本稿では、この両者の違い

とその実態についてさらに検討を加えたい。

在地勢力の発展という点で、上記の諸研究においても注目されている宗像地域では、小嶋篤氏が検討している。小嶋氏は、自身が設定する「宗像型石室」や重藤輝行氏（2009）の土師器分類でいう「高杯 Ea 類」を「宗像型土師器高杯」として捉えて注目し、それらが宗像地域を核としながら博多湾沿岸地域や遠賀川流域に影響を与えている可能性を指摘している（小嶋2012・2018）。宗像地域は、6世紀後半に102mの在自剣塚古墳が築造された後、大型円墳の手光波切不動古墳・宮地嶽古墳へと変遷するものと考えられており（池ノ上・花田1999；井浦2013）、前方後円墳の終焉から終末期古墳への転換を考える上で重要な地域の一つである。また埋納土坑から多数の馬具などが出土した福岡県古賀市船原古墳は、北部九州でも最も新しい時期に属するTK209型式期の前方後円墳であることが判明しているが（甲斐・岩橋2019）、これについても上記の宗像型土師器高杯の出土などから、宗像地域との密接な関係の下で築造された可能性が指摘されている（小嶋2018）。

この船原古墳について検討した鈴木一有氏は、先に挙げた静岡県賤機山古墳をはじめとする東海地域の事例と比較しながら以下のように検討している（鈴木2021）。氏は、奈良時代に3つの郡に区分される静岡市域について、1）有力古墳（円墳・賤機山古墳）が1基のみ単独で築造される地域（安倍郡域）、2）小型前方後円墳や方墳が複数系列にわたり築造される地域（有度郡域）、3）比較的大型の前方後円墳や円墳など、古墳時代前期からの中核的な首長系譜が認められる地域に分類する。氏は、3地域の違いと副葬品などの特徴から、1）を畿内有力氏族の直轄地、2）を伝統的な地域勢力の林立地、3）を国造の勢力基盤地域として理解しつつ、船原古墳については1）に近いとしながらも、前方後円墳である点が異なることを指摘する。船原古墳が所在する古賀市域は沿岸域の鹿部田渕遺跡など、糟屋屯倉との関連が指摘される地域であるが（小田2003；甲斐2004）、鈴木氏は、船原古墳の被葬者がミヤケ経営との関係性が見いだせるか、また倭王権との関係をどの程度見積もることができるかという点に注意を喚起している。氏の挙げた3つの類型については、北部九州において

も同様の地域がどの程度存在するのか検討する必要がある。

これに関連して他地域のあり方についてみた場合、先に挙げた「上毛野」地域について、若狭徹氏が前方後円墳の終焉について、前述の桃崎氏の議論を受けつつ大きく2つに区分している。氏は、6世紀前半に最大規模となる七輿山古墳（140m）を在り首長と捉えつつ、「武蔵国造の乱」後に七輿山古墳を頂点とする在り秩序が解体することを指摘する。その上で氏は、大型前方後円墳の並立から、総社古墳群において大型方墳への連続的築造へと移行する点に国造制の成立を見出す立場を示すとともに、周辺のミヤケが設置された地域では60～70m級の前方後円墳が築造されるあり方などを説明している（若狭2016・2021）。総社古墳群における方墳への移行あるいはその前後に国造制の成立を見出す見解は多く（右島1994・2011）、あわせて周辺のミヤケが設置された地域との間にどのような違いが見出されるかという点が注目される。

また2022年に開催された九州前方後円墳研究会では、古墳時代後期を中心として、「集落と古墳の動態」が検討された。ここでは本稿の内容と関連するものとして、上田龍兄氏、小嶋篤氏、長直信氏の論考について検討したい。上田氏は、比恵・那珂遺跡群および有田遺跡群の検討結果を踏まえ、「官家関連遺跡」の規模として50～100haの範囲を認定している。それ以外の集落遺跡については、大きく、大規模集落、居住単位に区分する。また氏は、様相1（TK23・47～MT15）、様相2（TK10～TK43）、様相3（TK209）に区分し、それぞれ那津官家設置以前、那津官家設置前後、那津官家設置後として集落と古墳の関係を整理している。博多湾沿岸地域では、様相2の6世紀中頃に境に前方後円墳の築造が低調となり、これに代わり6世紀後半には直径25m前後の円墳が地域最大の古墳となること、その場合に渡来人を含む開拓者集団のような形で出現する新来集団の長と、在来集団の長の墓の両者が存在することを指摘している。また小嶋篤氏の見解（2016）を踏まえつつ、福岡平野の西側で鉄器生産、東側で須恵器生産といった棲み分けがあった可能性を論じている。6世紀後半以降の博多湾沿岸地域では「大首長」といえるような古墳を欠くことを指摘している点は、前述の田村氏（2009）や筆者の見解（2012）と共通している。

小嶋氏は、遠賀川流域の古墳と集落について検討する中で、同地域が前述のように宗像地域の影響が認められること、また八女地域と博多湾沿岸・那津官家を繋ぐ幹線道としての「筑紫縦貫道」の存在に注目する一方で、遠賀川河口の尾崎・天神遺跡などにおける鉄器生産や倉庫群のあり方（重藤2018）から、博多湾沿岸の那津官家とは別に、遠賀川河口における鉄器生産と貢納という点を想定している（小嶋2022）。

また長直信氏は、周防灘沿岸南部から国東半島・別府湾岸周辺、日田盆地周辺のいわゆる「豊後」地域に関する検討を行い、これらの地域で前方後円墳の築造停止が比較的早い一方、横穴墓が各地で多数築造されること、また6世紀末～7世紀初頭に集中して横穴式石室や長大な掘立柱建物が築造されることから、直接的な外部からの梃子入れおよび国造制やミヤケといった政策との関連を想定している（長2021・2022）。

(3) 問題の所在と本稿の課題

以上、北部九州を中心として前方後円墳の終焉と終末期古墳への転換の問題に関する近年までの議論について検討してきた。その中で注目されているのは、各地における「最後の前方後円墳」の規模や内容、またそれに続く時期における古墳築造のあり方との連続性・非連続性という点、ミヤケの設置に伴う在地社会の対応、国造制・部民制との関連性、近畿地域をはじめとした外部との関係性といった問題である。また北部九州では、後期を通じて各地域で前方後円墳の築造が行われる一方、那津官家が設置された博多湾沿岸地域などでは大型前方後円墳の築造が低調であるという点も共通理解として認められる（田村2009；辻田2012；上田2022）。「磐井の乱」をめぐる議論は文献史学・考古学双方において膨大であり、その整理・検討は機会をあらためたいが、前方後円墳の築造停止という観点からは、「磐井の乱」以降の6世紀中葉において、「筑紫国造」がどのように設置されたのか（酒井2018）、「筑紫国造」は那津官家とどのような関係を持ち、また那津官家は各地のミヤケとどのようなつながりを持っていたのか（田中2019）、各地域における地域集団の編成がどのように行われた

のかといった問題が注目される所であり、これらは文献史学と考古学の双方における共通の課題ともいえるものである。これらの課題は、古代国家形成過程における6世紀中葉の画期という観点からも重要な論点と位置づけられており（岩永2003・2022；菱田2007；辻田2012・2018）、本稿でもこの点に留意しつつ検討を行いたい。

以上をふまえて具体的に本稿で課題としたいのは、前方後円墳の築造停止とその背景に関して、ミヤケが設置された地域とそれ以外の地域で違いがあるかどうかという点、また他地域と比較可能な形での整理が可能かという点である。特に、筆者らもこれまで注目してきたように、北部九州の中でも博多湾沿岸周辺において前方後円墳の築造停止が早いことがどのように説明できるのかという点を課題としたい。これらの問題意識の下に、本稿では主に令制国の「筑前」「筑後」にあたる地域を対象として前方後円墳の築造停止のあり方を検討し、あらためて類型化を試みる。その上で、他地域との比較を行いながら、北部九州における前方後円墳の終焉とその歴史的背景について検討を行う。北部九州という点では、いわゆる「筑紫・肥・豊」の三地域を扱うべきところであるが、本稿ではこのうち「筑紫」にあたる福岡県西半部の地域を中心に検討を行い、「肥」「豊」の地域と相互の関係については稿をあらためて検討したい。

3. 北部九州における前方後円墳の築造停止の諸類型

(1) 各地における前方後円墳の終焉状況の概観

ここではまず、北部九州の中でも福岡県西半部を中心に、「最後の前方後円墳」が築造される地域ごとに終焉のあり方を概観する。全体を示したものが表1と図1であり、西から大きく【糸島半島】【糸島平野・今宿地域】【早良平野周辺】【福岡平野周辺】【粕屋平野周辺】【宗像地域】【遠賀川中・下流域】【遠賀川上流域】【筑紫野・小郡地域】【筑後川中流域】【八女地域】の11の小地域に区分して検討を行う。各地の古墳築造動向と時期区分については、先にも挙げた柳沢一男氏（1992）、重藤輝行氏（2007・2010・2011）の他、久住猛雄・宮元香

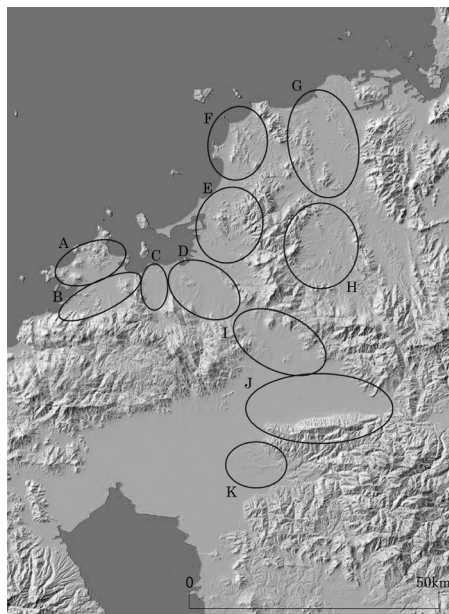


図1 本稿の検討対象地域

- A: 糸島半島 B: 糸島平野・今宿地域 C: 早良平野
 D: 福岡平野 E: 粕屋平野周辺 F: 宗像地域
 G: 遠賀川中・下流域 H: 遠賀川上流域
 I: 筑紫野・小郡地域 J: 筑後川中流域 K: 八女地域

号墳（方墳か）・G-6号墳（多角形墳）が築造され、後者では庚寅銘大刀が出土している。大宝二年（702）の筑前国嶋郡川辺里戸籍の肥君猪手に連なる可能性が想定されている（小田1997；丸山1997；坂上2019）。

【糸島平野・今宿地域】糸島平野部では、6世紀前～中葉に築かれ、装飾付須恵器や単龍環頭大刀・金銅装馬具類などが出土した西堂古賀崎古墳が50m前後の規模の前方後円墳の可能性が高い。古今津湾南岸の今宿地域では、高祖山北麓に前期以来多数の前方後円墳が築造されているが、後期には今宿大塚古墳（●・64m・MT15）および谷上古墳（●・37m・TK10）が築造されるのが単独墳としては最後で、その後は山麓部に築かれる群集墳の中で、飯氏B-14号墳（●・27m）が築造され、群集墳造営が続く。本地域以西では、上記の元岡石ヶ原古墳や西堂古賀崎古墳をはじめ、それ以降においても、単室両袖型横穴式石室が

織氏（2010）、蔵富士寛・橋本達也氏（2011）らの成果を参照した。以下、文章中で「●・m」で前方後円墳と規模を表す。

【糸島半島】糸島地域の西部の状況については、未調査の古墳が多いためここでは保留とするが、唐津平野以西も含め、後期（あるいは中期後半以降）に70m超級の前方後円墳が不在である点が特徴である。糸島半島東部の福岡市元岡・桑原遺跡群では、TK10型式期に見瀬丸山型（土生田2012）とされる元岡石ヶ原古墳（●・49m）が築造されるのが最後で、以後群集墳の元岡石ヶ原古墳群が造営される。7世紀初頭前後には、元岡G-1

表 1 福岡県西半部における「最後」の前方後円墳

県名	市町村	地域区分	古墳名	埋葬施設	規模 (m)	築造時期	備考	後続大型円墳・方墳
福岡	福岡市西区	糸島半島東部	石ヶ原古墳	単室両袖型横穴式石室	49	TK10		元岡 G-1号・6号墳
福岡	糸島市	糸島平野部	西堂古賀崎古墳	単室両袖型横穴式石室	50 ?	TK10		
福岡	福岡市西区	今津湾岸	今宿大塚古墳	—	64	MT15	周堤	
福岡	福岡市西区	今津湾岸	飯氏 B14号墳	単室両袖型横穴式石室	27	TK10～MT85		
福岡	福岡市西区	早良平野	羽根戸南 F-2号墳	単室両袖型横穴式石室	16.3	TK10		夫船塚1号・2号墳
福岡	福岡市城南区	福岡平野西部	神松寺御陵古墳	複室両袖型横穴式石室	20	TK10～MT85		
福岡	福岡市南区	福岡平野東部	松原 2号墳	単室両袖型横穴式石室	40	TK43		
福岡	福岡市南区	福岡平野東部	柏原 A2号墳	単室両袖型横穴式石室	40以上	TK43		
福岡	福岡市博多区	福岡平野東部	東光寺剣塚古墳	複室両袖型横穴式石室	75	TK10	石屋形	今里不動古墳
福岡	春日市	福岡平野東部	下白水大塚古墳	単室両袖型横穴式石室	41	TK43		
福岡	那珂川市	福岡平野東部	中原 I-1号墳	単室両袖型横穴式石室	24	TK10～MT85		
福岡	粕屋町	粕屋平野周辺	鶴見塚古墳	両袖型横穴式石室	80	TK10	石屋形	
福岡	古賀市	粕屋平野周辺	船原古墳	複室両袖型横穴式石室	45以上	TK209	埋納土坑	
福岡	福津市	宗像地域	在自剣塚古墳	—	102	TK43		手光波切不動古墳
福岡	宗像市	釣川流域	相原 E-1号墳	複室両袖型横穴式石室	62以上 ?	TK43		
福岡	鞍手町	速賀川中流域	(新延大塚古墳)	複室両袖型横穴式石室	円墳・30	TK43	先前方後円墳不在	銀冠塚古墳
福岡	桂川町	鶴波川流域	天神山古墳	(単室両袖型横穴式石室)	68	MT85～TK43	周堤	山王山古墳
福岡	飯塚市	嘉麻川流域	寺山古墳	—	68	MT85～TK43		川島11号墳
福岡	嘉麻市	嘉麻川上流域	次郎太郎 1号墳	—	50	TK43 ?		
福岡	筑紫野市	筑紫野・小郡地域	(五郎山古墳)	複室両袖型横穴式石室	円墳・32	TK43	先前方後円墳不在	
福岡	小郡市	筑紫野・小郡地域	花立山穴観音古墳	複室両袖型横穴式石室	33	TK43		
福岡	朝倉市	筑後川中流域北岸	鬼ノ枕古墳	複室両袖型横穴式石室	56	TK43		
福岡	うきは市	筑後川中流域南岸	重定古墳	複室両袖型横穴式石室	70以上	TK43	裝飾	楠名古墳
福岡	久留米市	筑後川中流域南岸	田主丸大塚古墳	—	103	TK43		安富古墳
福岡	八女市	八女地域	乗場古墳	複室両袖型横穴式石室	90	TK43	裝飾	岩戸山4号墳

※新延大塚古墳・五郎山古墳は前方後円墳でなく円墳

主体で、地域の上位の古墳において複室構造の横穴式石室がみられないという特徴がある。

【早良平野周辺】前期末の拝塚古墳（●・75m）以降、中・後期を通して現状で70m 超級の前方後円墳の存在が認められず、西側から南側にかけて広がる山麓地帯に群集墳が多数造営される。その中で、羽根戸南古墳群中に羽根戸南 F-2 号墳（●・16.3m・TK10）が築造されている。前述の有田遺跡群で6世紀後半代の大型倉庫群や三本柱柵が検出され、那津官家との関連が想定されるとともに、後には早良郡衙となることが指摘されている（米倉1993・2003）。6世紀中葉以降では、装飾壁画を伴う複室構造の横穴式石室を持つ浦江1号墳（円墳・25m）が築造され、6世紀末～7世紀初頭前後に、複室構造の石室をもつ大型方墳の夫婦塚1号墳・2号墳が築造される。

【福岡平野周辺】前述の福岡市比恵遺跡において、6世紀後半代に大型倉庫群や三本柱柵が検出され、那津官家の中枢の可能性が想定されている。近隣の東光寺剣塚古墳（●・75m・TK10）は三重の周溝を持ち、複室構造の横穴式石室に石屋形を伴うもので、福岡平野で最大であり、那津官家の管掌者の墓地である可能性が想定される。また本古墳例も含め、断続ナデ技法を伴う円筒埴輪は、ミヤケとの関連が指摘されている（井上2004）。本古墳がTK10型式前後に築造された後は、大型前方後円墳の築造はみられない。6世紀後半代の築造と目される板付八幡古墳については前方後円墳の可能性も指摘されるが、削平されており不明な点も多い（上田2022）。周辺ではTK10型式を契機として牛頸窯跡群の操業が開始し、油山山麓地帯では、多くの群集墳が築造される。その中でも、桧原2号墳・柏原 A2号墳・中原 I-1号墳は、それぞれ群集墳の中で20m～40m規模の前方後円墳として築造されており、以後6世紀代を通じて多数の群集墳が造営される。7世紀初頭以後に、今里不動古墳や寺塚穴観音古墳などの複室の大型石室を有する大型円墳が築造される。

【粕屋平野周辺】粕屋町阿恵遺跡において、7世紀後半の糟屋評衙と目される建物群が検出されており、周辺に先行する糟屋屯倉の関連施設の存在が想定される（桃崎2010；岩永2014；西垣2018）。この一角に、TK10型式前後の築造とみ

られる鶴見塚古墳（●・80m）がある。横穴式石室の玄室（『筑前国続風土記拾遺』の記述では長さ三間 [5.4m] とされる）に石屋形を伴う点が東光寺剣塚古墳と共通する。これ以降、周辺では大型前方後円墳の築造はみられない。また糟屋屯倉の港湾施設とも想定されている古賀市鹿部田渕遺跡（小田2003；米倉2003；甲斐2004）の周辺では、6世紀中葉に円墳とされる花見古墳が築造されるが、前方後円墳については不明で、6世紀末前後に前述の船原古墳（●・45m以上）が築造される。単独墳として築造される前方後円墳としては、北部九州の中でも最も新しいものである。

【宗像地域】5世紀中葉の勝浦峯ノ畑古墳を嚆矢として築造される津屋崎古墳群の中で、多数の支群が含まれつつ、6世紀を通して多数の前方後円墳が築かれるが、6世紀後半に最大にして最後の前方後円墳である在自剣塚古墳（102m）が築造される。この後、7世紀代には大型円墳の手光波切不動古墳・宮地嶽古墳が築造される。須恵器生産地として宗像窯跡群が操業されている。

【遠賀川中・下流域】本地域では、5世紀代から6世紀代にかけて大型前方後円墳の築造状況が不明であるが、6世紀後半代に大型円墳（30m）の鞍手町・新延大塚古墳が築造され、古月横穴墓群をはじめとした多数の横穴墓群が造営されている。新延大塚古墳に後続して、円墳の銀冠塚古墳などが築造されている。宮若市・竹原古墳も独立丘陵上に築かれた単独の円墳（18m）であり、彩色壁画を持つ点で注目される。さらに後続する損ヶ隈古墳でも彩色壁画がみられる。

【遠賀川上流域】大きく遠賀川本流の嘉麻川と西の穂波川流域に分かれ、それぞれが後の鎌郡・穂波郡に対応するとともに、安閑二年（535）に鎌屯倉・穂波屯倉が設置された地域と目されている（嶋田1991・2015；松浦2005・2014；桃崎2010；辻田編2015）。前者では、6世紀前半に嘉麻市域で竹生島古墳・次郎太郎古墳群などの50m前後の前方後円墳が築かれた後、6世紀後半に飯塚市寺山古墳（●・68m）が築かれる。周辺では川島古墳群などの群集墳や多数の横穴墓群が営まれ、須恵器の生産地として井手ヶ浦窯跡群が操業されている。6世紀末には川島古墳群中に円墳で彩色壁画を持った川島11号墳（径15m）が築造される。後者の穂波川流域では、6世紀前半に装飾古墳の王塚古墳（●・86m）が

築造された後、ホーケントウ古墳（●・50m 前後）の築造を挟みながら、TK43 型式前後に天神山古墳（●・68m 前後）が築造されている。ホーケントウ古墳・天神山古墳は飯塚市教育委員会および桂川町教育委員会により調査が行われており、その成果をもとに後日検討を行いたい。現状では天神山古墳が最後の前方後円墳とみられる。桂川町周辺では近年調査された須恵器窯跡と横穴墓を含むコノマ遺跡をはじめ、多数の横穴墓群が営まれるが、終末期の大型円墳等については不明である。穂波川流域北部では、6 世紀末～7 世紀初頭に敲打技法による装飾を持つ円墳の山王山古墳（径22m）が築かれている。

【筑紫野・小郡地域】筑紫野地域では、6 世紀後半に下白水大塚古墳（●・50m 前後）などの築造が知られているが、周辺との関係について不明な点も多い。小郡市域では、花立山古墳群で群集墳・横穴墓群の集中的造営が行われており、その中で TK43～209 型式にかけて花立山穴観音古墳（●・33m）が築造されている。他方で、TK43 型式期には、独立丘陵上に単独の大型円墳で装飾古墳の五郎山古墳（径32m）が築造されており、周辺との関係が課題である。この他、筑前町では仙道古墳・砥上観音塚古墳などの円墳で装飾古墳が知られている。

【筑後川中流域】筑後川中流域北岸の甘木・朝倉地域では、菱野剣塚古墳（●・71m・TK10～TK43 か）や鬼の枕古墳（●・56m・TK43）の築造が最後で、周辺で多数の群集墳が築造される。筑後川を挟んだ南岸の浮羽地域では、西側で田主丸大塚古墳（●・103m）、東側で重定古墳（●・70m 以上）などの大型前方後円墳が TK43 型式期に築造され、それぞれ多数の群集墳が築かれているが、特に西側では中原狐塚古墳や珍敷塚古墳などの装飾古墳の他、大型円墳の下馬場古墳や安富古墳が築かれる。東側では重定古墳に隣接して大型円墳の楠名古墳が築造されている。それ以外の久留米市域の前方後円墳に関しては年代が不明な資料が多く、ここでは保留する。

【八女地域】筑紫君磐井の墳墓と目される 6 世紀前半の岩戸山古墳（●・138m）の後、善蔵塚古墳（約90m）・鶴見山古墳（87.5m）などの大型前方後円墳の築造が継続する。最後の前方後円墳と目されるのは乗場古墳（●・90m・TK43 型式）であるが、この時点でも複室構造の横穴式石室に装飾壁画を伴うという在

地的伝統を堅持している。周辺では童男山古墳群や立山山古墳群などの群集墳が多数営まれ、かつ塚ノ谷窯跡群をはじめとした八女窯跡群で須恵器の生産が行われている。乗場古墳以後では、岩戸山4号墳が単独の大型円墳（約30m）として7世紀前～中葉に築造されている（柳沢2014）。研究史で挙げた下原幸裕氏は、八女丘陵周辺を「筑紫君」および「筑紫国造」の本拠地として捉えつつ、有力な終末期古墳としての岩戸山4号墳の被葬者を「筑紫国造」の候補として比定している（下原2006）。

(2) 前方後円墳築造停止の類型化

以上、11地域について個別に概観したが、研究史でもみたように、地域を横断していくつかのパターンが認められる。まず、6世紀中葉以降に全長70m以上の大型前方後円墳の築造が低調もしくは不在で、群集墳の中に小型前方後円墳が営まれる地域と、6世紀中葉以降において、大型前方後円墳の築造が継続し、大型化した形で終了する地域がある。また、6世紀前半以前に在地の大型前方後円墳の築造状況が不明である一方、6世紀後半代に大型円墳などが新たに出現する地域などもある。全体として、これらの地域全体の上位に立つような突出した規模の前方後円墳などは見出されず、個別の地域社会が並立する状況として理解することができる。これは、後述するように6世紀中葉以降の列島全体での政治的動向と関連する可能性とともに、他地域とも比較してその背景について考えていく必要がある問題である。また、前方後円墳の築造停止後に大型方墳が出現するのは、ここで扱った地域の中では早良平野周辺のみで（糸島地域東部の元岡G-1号墳については方墳の可能性が指摘されている）、他の地域は全て大型円墳であるといった特徴が認められる。

ここでは、以上の検討を元に、前方後円墳の築造停止のあり方について、類型化を行いたい。大きくは、すでに田村悟氏（2009）や筆者（2012）が検討しているように、大型前方後円墳の在・不在という点で以下のA類型・B類型に区分しつつ、それ以外の要素も加味しながら細分を行う。

A 類型：大型前方後円墳の築造停止が早く、小規模化する地域

B 類型：前方後円墳の規模が拡大した後、築造が停止する地域

このうちの A 類型については、群集墳の築造が行われる中で小規模な前方後円墳が築造される場合と、60m 級の前方後円墳を最大としながら築造が停止する場合の両者があり、それぞれを A1 類型、A2 類型とする。また、先行する在地の前方後円墳などが不明瞭ながら、6 世紀後半に独立して大型円墳などが出現する場合について、別に C 類型として設定する。以下、A ～ C の各類型について検討したい。

(3) A 類型の具体例

A 類型は、全長70m以上の大型前方後円墳の築造停止が早く、小規模化する地域であり、北部九州では主に福岡平野・糟屋平野以西の地域が該当する。これは糸島地域以西の唐津平野周辺や佐賀県西部・長崎県域など西北九州地域全般も同様である（後述する壱岐地域は除く）。大型前方後円墳の不在という点を特徴とし、福岡平野・早良平野をはじめ、ミヤケ関連の地域に多い。またこれらの地域のうち、特に早良平野以西では、古代寺院の造営も活発でないという共通点がある。この A 類型は、上述のように細分できる。

- ・ A1 類型：群集墳の中に小型前方後円墳が築造され、かつ単独の大型前方後円墳が不在の場合。多くは、群集墳の築造の嚆矢として小型前方後円墳が築造される。
- ・ A2 類型：60m 級の単独の前方後円墳を最上位とし、その周囲に群集墳や横穴墓が築造される。

A1 類型は福岡平野・早良平野・今宿地域などが該当し、那津官家との関連が想定される地域である。福岡平野以西では、地域集団の代表者の墓とみられる東光寺剣塚古墳など以外では、複室構造の石室が少なく、単室両袖型横穴式石室が主体で階層的序列が明瞭であるという特徴がある（辻田2011）。研究史でも触れたように、こうした群集墳中で小型前方後円墳が築かれる事例は全国的にも広く知られている。辰巳和弘氏（1984）は、静岡県的事例を検討する中で、30m 級の前方後円墳が群集墳築造の契機となり、その後前方後円墳が築かれな

かったこと、その規模と墳丘形態に「一定の規制（規格）」があったことを指摘している。3基の前方後円墳を挙げているが、いずれも6世紀中葉の早い時期とみている。福岡平野以西の例もこれに近いが、静岡県内の事例では片袖式横穴式石室など、近畿系の横穴式石室を採用している点がやや異なる。福岡平野の単室両袖型横穴式石室の事例においても釘付木棺を採用する事例（小嶋2011）や、礫石による閉塞を行う事例が、近畿とのつながりを示す例ともいえよう。近畿では、奈良県龍王山古墳群とその中の48号墳（40m）などの事例が知られる。なお、福岡平野および早良平野では、6世紀末～7世紀前葉にそれぞれ大型円墳・方墳の今里不動古墳・寺塚穴観音古墳・夫婦塚1号墳・2号墳が築かれ、そこでは大型の複室両袖型横穴式石室が営まれていることから、群集墳被葬者層の上位に位置する被葬者の古墳として築造されているものとみられる。前述の元岡石ヶ原古墳が築造された糸島半島東部や、西堂古賀崎古墳が築造された糸島平野も前方後円墳の築造停止が早い点で本類型に該当するものと考えられる。

A2類型は、遠賀川上流域の嘉麻川流域・穂波川流域の両地域が該当する。68m前後の前方後円墳（寺山古墳・天神山古墳）が築かれているが、いずれも広義のミヤケ（鎌屯倉・穂波屯倉）が設置され、後に評・郡となる地域という特徴がある。70m超級の大型前方後円墳の築造は行われぬが、MT85～TK43型式期にかけて60m級の前方後円墳の築造が継続するという点でA1類型と区分した。また本稿では対象としていないが、大抜屯倉が設置された可能性が想定されている北九州市小倉南区の曾根平野周辺では、同様に6世紀中葉～後葉に荒神森古墳（68m）が築かれた後、規模が縮小する。この「68m前後」という規模は、関東周辺をはじめ、ミヤケ関連地域で築造される最後の前方後円墳として全国的に広く認められる数値であり（若狭2017・2021）、一定の規格が存在した可能性を示唆している。

またこれらのA1・A2類型で埋葬施設が判明している事例では、元岡石ヶ原古墳・西堂古賀崎古墳がいずれも単室両袖型横穴式石室であり、寺山古墳も不明ながらその可能性がある。未調査の古墳も多いが、複室構造の石室が少ない点が共通している。

A1類型の福岡平野周辺は、牛頸窯跡群で須恵器生産が営まれ、また早良平野周辺では鉄器生産が行われており、比恵・那珂遺跡群と有田遺跡群といった、ミヤケ関連遺跡を核としながら多数の群集墳が営まれている。また A2類型の遠賀川上流域では、嘉麻川流域側の飯塚市井手ヶ浦窯跡群で大規模な須恵器生産が行われている。

(4) B 類型の具体例

B 類型は、前方後円墳の規模が90～100m 級に大型化した後、前方後円墳の築造が停止し、大型円墳に転換する地域であり、北部九州では主に宗像地域、筑後川中流域南岸、八女地域などが該当する。また本稿では扱っていないが、壱岐島がこれに該当する。田村悟氏（2009）が、「君」「直」姓をもつ有力豪族の奥津城と想定した地域にあたる。これらの地域では、壱岐を除いて、それぞれの地域で大規模な須恵器の窯跡群が見つかっており、それぞれの地域集団単位で自家消費的に須恵器生産を行っていたことが想定される。これらの地域については、有力な地域集団が、近畿地域や福岡平野周辺との関係を取り結びつつ、在地の勢力基盤を維持・発展させている様相として理解できるが、北部九州の場合はそれらがいわゆる「国造」として任命された事例と「国造」でなく在地の有力者として大型前方後円墳が築かれた事例の両者が含まれる。「国造」として任命された事例として、上記の壱岐島（「壱岐嶋造」）が挙げられ、それ以外の地域は、在地位層が地方伴造などのような形で近畿中央とつながりを持ちながら、各種生産と貢納を行っていたものと想定される。

またこれらの地域では、前方後円墳が大型化した後、7世紀初頭から前半にかけて大型円墳が営まれ、大型古墳の造営が継続するケースが多いという特徴がある。その場合でも7世紀中葉までには大型古墳の造営は停止し、7世紀後半以降には追葬や墓前祭祀が行われる。上記の例でいえば、宗像地域では手光波切不動古墳・宮地嶽古墳、筑後川中流域南岸では安富古墳・楠名古墳など、八女地域では岩戸山4号墳（下茶屋古墳）、壱岐島では、双六古墳の後に築造された4基の大型円墳（笹塚・兵瀬・鬼の窟・掛木）がこれに該当し、いずれも直

径30m 以上の場合が多く、在地的な文化伝統が継続する形で複室構造の横穴式石室が築造される。先のA類型でも7世紀初頭前後に大型円墳・方墳が営まれるが、これらはミヤケの管掌者ないし小地域の代表者の墳墓という点で、B類型の墓地と性格および外見上は類似している。両者の違いは、6世紀末～7世紀初頭に至る歴史的な経緯と背景に起因するものと理解することができる。

(5) C類型の具体例・その他

C類型は、前時期までに在地の大型前方後円墳などが不在ながら、6世紀後半代（TK43型式期）に大型円墳が出現する場合である。具体例としては、筑紫野・小郡地域の五郎山古墳、遠賀川中流域の鞍手町新延大塚古墳、またやや小規模ながら宮若市竹原古墳などが該当する。これらは、複室両袖型横穴式石室を主体部として持つ点が共通しており、さらに五郎山古墳・竹原古墳は独立丘陵上に築かれ彩色壁画を持つといった共通項がある。また本稿では対象としていないが、桃崎祐輔氏（2010）が「豊」地域に設置された勝碕屯倉に関連する古墳として想定する北九州市小倉北区日明一本松塚古墳や、同じく肝等屯倉に関連する古墳として挙げる苅田町雨窪古墳も、いずれも先行する大型前方後円墳の築造などが認められず、かつ複室構造の横穴式石室であるという特徴がある。前者は彩色壁画を持つ点も先の五郎山古墳・竹原古墳と共通する。副葬品などが不明であるため、評価は困難であるものも多いが、石室の規模・構造からみて、前方後円墳ではないが各地域の最上位の墳墓として築造されているものとみられる。上記の脈絡からすれば、ミヤケなどに関連する被葬者が埋葬されている可能性は高いものと考えられる。

(6) 小結

以上、北部九州のうち、福岡県西半部の地域を中心として、各地における前方後円墳の築造停止のあり方を検討し、大規模前方後円墳の在・不在という観点をもとに大きく3つの類型を抽出した。問題となるのは、これらの相互の関係とその歴史的背景である。すでにみたように、北部九州では、ミヤケの設置

に関連すると想定される遺跡が具体的に検出されていることから、前方後円墳の築造停止がそうしたミヤケの設置と関連する事例も認められ、その実態についても検討する必要がある。またこうした北部九州の諸類型が本地域に特有のものであるのか、他地域でも広く認められるものであるのか、といった点についても課題である。以下、予察も含めてこれらの点について考察したい。

4. 考察：北部九州における前方後円墳の築造停止とその背景

ここまでみてきたA類型～C類型をまとめたものが表2である。以下、各類型とその背景について検討する。

まずA類型は、先に挙げたようにミヤケ設置との関連が想定される地域であるが、特にA1類型では那津官家との関連が想定される比恵遺跡群、有田遺跡群とのつながりがつよい。A2類型では、具体的なミヤケ関連遺跡については未検出ながら、鎌屯倉・穂波屯倉などとのつながりが想定される。このうちA1類型に関連して、牛頸窯跡群は那津官家によって管掌されたことが想定され、須恵器の形態・変遷自体も陶邑における変遷とほぼ並行することが指摘されている（渡邊1994；岡田2003；長2009；石木2019；足達2022a・b）。逆にB類型の宗像窯跡群や八女窯跡群などでは、6世紀後半代に形態的に古い特徴が持続することが指摘されており（長2009；足達2022a・b）、そうした須恵器生産の管掌形態や近畿との結びつきのあり方がA類型とB類型の地域同士の間では異なっていた可能性を示唆している。

なお、本稿でいうミヤケは、主に館野和己氏の研究（1978・1999・2004・2012）に依拠しつつ、ヤマト王権の置いた政治的軍事的拠点とする理解に基づく。ただその場合も、館野氏が指摘するように、ミヤケ自体はヤマト王権との結び付きを示す建物や場を指すものであり、本稿のB類型のような有力氏族の本拠地の拠点も同様にミヤケとして位置づけられていたものと考えられる（館野2004）。その上で館野氏は、「武蔵国造の乱」後に設置された4つのミヤケについて「国造支配のためにその拠点に置かれたミヤケは当然のこととして記載

表2 北部九州における前方後円墳築造停止の諸類型

分類	特徴	地域	備考
A1類型	大型前方後円墳の築造停止が早く（TK10前後）、群集墳の中で小型前方後円墳が築造される場合	福岡平野、早良平野、糸島半島東部、糸島平野・今宿地域など	牛頭窯跡群
A2類型	大型前方後円墳が不在で、60m級の前方後円墳を上位として周辺に群集墳・横穴墓が営まれる	遠賀川上流域など	井手ヶ浦窯跡群
B類型	前方後円墳の規模が90～100m級に大型化した後、大型円墳に転換する	宗像地域、筑後川中流域南岸、八女地域など	宗像窯跡群、八女窯跡群
C類型	前時期までに在地の大型前方後円墳などが不在ながら、6世紀後半（TK43）に大型円墳などが出現する	筑紫野・小郡地域、遠賀川中流域など	五郎山古墳、新延大塚古墳など

されずその他の何らかの特別の目的をもって置かれたミヤケのみを記したのであろう。それは筑紫国造における糟屋屯倉と同じである」（館野2004：pp.153-154）と述べているが、『日本書紀』などにその名を残す北部九州各地のミヤケは、その意味でBタイプのミヤケとはやや異なる位置づけがなされるものと考ええる。

またAタイプの地域では、群集墳や横穴墓の事例も含め、いわゆる単龍鳳環頭大刀などの装飾付大刀が副葬される場合が多い。これに関連して、筆者はこれらの装飾付大刀とミヤケの分布との関連について指摘したことがある（辻田2012）。これについては、ミヤケはヤマト王権との関わりがあるもので、むしろ振り環頭大刀などの倭風大刀との関連を考えるべきとする見解がある（齊藤2014・2019）。また若狭徹氏（2017・2019）や鈴木一有氏（2019）は、関東や東海地域の事例をもとに、地域の最上位層の墳墓には単龍鳳環頭大刀などは副葬されず、振り環頭大刀などが副葬されるのに対し、単龍鳳環頭大刀などはその周辺の階層において副葬されると指摘している。この点からすれば、単龍鳳環頭大刀などの装飾付大刀はミヤケとは関連しないというよりは、むしろミヤケの管掌者などを媒介としながら、その配下の上位層の間で保有されたものと考えられる（若狭2017：pp.246-247）。上記の事例では、例えば遠賀川上流域の穂波川流域では、6世紀前半代に王塚古墳や山の神古墳（●・80m）の追葬の被葬者に振り環頭大刀が副葬される一方、鶴三緒横穴墓などで単龍鳳環頭大刀が副葬されている（辻田編2015）。また糸島半島東部や糸島平野周辺でも、西堂

古ヶ崎古墳や元岡石ヶ元12号墳をはじめ、副葬事例が集中している。他方で、6世紀後半以降では、装飾付大刀はB類型に該当する八女古墳群でも前述の乗場古墳や釘崎3号墳（●・35m）、また壱岐の双六古墳（●・91m・TK43型式）などで副葬事例が知られ、双六古墳では単龍鳳環頭大刀とともに振り環頭大刀・圭頭大刀の両者が副葬されていることから、6世紀後半代においては圭頭大刀などとともに上位に位置づけられていたものとみられる（菊地2010；豊島2018）。筆者は、古墳時代後期後半においては、ミヤケおよび地域の上位層を介した近畿地域と各地の地域集団とのつながりの中で、装飾付大刀や馬具類などの授受が行われた可能性を想定しているが（辻田2022）、そのような脈絡において、ミヤケ関連地域で装飾付大刀の分布が多いことも理解できるものとする。

B類型は、田村悟氏（2009）が指摘しているように、「君」・「直」といった姓を持つ有力豪族に相当するとみられ、今回対象とした地域では、それぞれ「胸肩君」「的臣」「筑紫君」などが想定される。前述のように、壱岐古墳群などもこの類型に該当するとみられることから、そうした有力豪族の中には壱岐古墳群のように、国造（「壱岐嶋造」）として任命される場合もあったものと想定される。あわせて、上述のように独自に須恵器生産などを行う場合が多いことが確認できる。大規模な前方後円墳と民族的な階層秩序という点では、松尾充晶氏（2005）が山陰の「出雲」地域の東西で検討したあり方が対比される。当該地域では、6世紀中葉～後葉に、西部の出雲平野では大念寺古墳や上塩冶築山古墳などの大型前方後円墳・円墳で振り環頭大刀や圭頭大刀などの倭風大刀が副葬されるのに対し、東部の意宇平野では山代二子塚古墳のような前方後方墳を上位としながら、龍鳳環頭大刀のような舶載系の装飾付大刀が副葬される。6世紀末以降は、東部に山代方墳のような大型方墳が築造され、西部は後に出雲国の中心となる東部の勢力に吸収されたものと考えられている。西部は物部氏、東部は蘇我氏といった中央の「大伴造氏族」と結び付きながら地域首長が存在していたあり方が復元されている（松尾2005）。本稿でみたB類型は、広い意味でこの東西の「出雲」地域と共通するが、本稿の対象地域では、大型前方後円墳から大型円墳へという変遷を基調とする点が異なっており、またその

点の特徴ともいえる。

C類型は、6世紀後半代に単独墳として出現するもので、先行して大型前方後円墳などが築造されていないため、系譜関係が不明な場合が多い。また現状では副葬品の内容などが知られていない事例も多いが、複室両袖型の横穴式石室を構築し、装飾古墳の分布の周縁域にありながら、新たな意匠を伴う彩色壁画が描かれている点が共通する。また新延大塚古墳で出土した心葉形十字文馬具などが「額田部」との関連が指摘されるなど(桃崎2019b)、いずれも各地域を代表するのみならず、北部九州の中でも最上位に位置づけられる古墳である点が注意される。

このうちC類型として挙げた五郎山古墳については、複室両袖型横穴式石室の玄室長が約4.2m、幅約3mと長大である点が特筆される。北部九州では、壱岐古墳群や八女古墳群など、石室全体の規模が大きいのでも、玄室長は3m台の場合が基本であることからすれば、玄室長4.2mという規模は、福岡市東光寺剣塚古墳や同今里不動古墳とともに、北部九州でも最大級であり、壮麗な装飾壁画を伴うこととあわせて、本古墳が在地の最上位に位置づけられる存在であったことを示唆している。なお、本稿対象地域で玄室長4.2mの規模を持つ石室はこの3基以外では桂川町王塚古墳や粕屋町鶴見塚古墳などに限定されている。五郎山古墳の位置づけを考える上での指標の一つとして注目しておきたい。また五郎山古墳が築造された筑紫野市原田の地域は、式内社の筑紫神社が所在することでも知られるが、筑紫神社付近が南北交通の要衝であり、また「筑前」・「筑後」の境界の基点ともなっている点(井上1970;片岡2000a・b;木本2009)は、本古墳の位置づけを考える上でも留意しておく必要がある。笹川進二郎氏は、那津官家との間を南北につなぐ交通路という観点から筑紫神社付近を含めた筑紫野地域の重要性を指摘している(笹川1985)。

ここで関連して想起されるのが、研究史で挙げた静岡県賤機山古墳の事例である。鈴木一有氏は、前述のように、賤機山古墳について、1)有力古墳(円墳)が1基のみ単独で築造される地域(安倍郡域)として分類し、「畿内型」横穴式石室と家形石棺、副葬品から地域の最上位層と位置づけるとともに、「畿内

有力氏族の直轄地」として評価している（鈴木2019・2021）。氏の分類1）は、ここでいう筆者のC類型と現象自体は近似しており、五郎山古墳は賤機山古墳と同様に直径32mの円墳で独立丘陵上に築かれている。他方、例えば五郎山古墳は、在地系の複室両袖型横穴式石室で彩色壁画を持つことから、在来の上位層といった被葬者像が導かれる。北部九州では、基本的にいわゆる「畿内型」横穴式石室そのものは導入されず、在地の単室両袖型もしくは複室両袖型の横穴式石室のいずれかである（重藤2020）。その場合に、羨道天井部で前室上面を高く造るか、羨道天井部全体を同じ高さで造るかといった違いがあり、また木棺が採用される場合などに近畿地域の影響が認められる場合があるが（蔵富士2009；太田2016など）、在地の上位層の古墳では、基本的に在地系の横穴式石室である点に注意する必要がある。この点を差し引いたとしても、本稿のC類型に該当する事例として挙げた先の北部九州の古墳は、いずれについても「畿内有力氏族の直轄地」というよりは、在来の上位層が、近畿地域などとも密接なつながりを持ちながら、地域の代表者として大型円墳に埋葬された、とするイメージに近いものと考えられる。この違いが、北部九州と東海といった地域の違いによるものであるのか、また6世紀後葉における最上位墓としての単独円墳の築造というあり方が表面的に共通するのみで、背景が異なるのか、あるいは実態としては共通性が高いのかといった点については、現状で可能性を限定することは難しい。ただ、ここで挙げた北部九州のC類型に関していえば、前述のようにどちらかといえばミヤケとのつながりが想定されるとともに、また大規模前方後円墳ではなく、大型円墳の築造が選択されている点で、A類型とも一部共通し、また一定の「制約」のもとで築造が行われているといった理解は可能であるものと思われる。

またこれに関して、鈴木氏が同様に1）の事例に該当する可能性を指摘した古賀市船原古墳について検討しておきたい。前述のように、船原古墳はTK209型式期に築造された北部九州でも最も新しい時期の前方後円墳であり、埋葬施設は複室構造の横穴式石室である。全長は45.5m以上と復元されており、現状では最大50m前後といった規模が想定される。墳丘裾部の埋納土坑から出土し

た多数の馬具類や鉄製品は、朝鮮半島系のももの含みながら、近畿地域とのつながりのもとでもたらされたものが大きな割合を占めるものとみられる。ただ、前述の小嶋篤氏（2018）も指摘するように、墳丘形態や土師器高杯などからも、宗像地域との関係がつよく、「畿内有力氏族の直轄地」といった理解とはやや距離があるものと考えられる。船原古墳については、ここではさしあたり「その他」として扱っておくが、本稿でみてきた前方後円墳の築造停止パターンでいえば、50m 前後の規模と想定されることから、A1 類型もしくは A2 類型のいずれかに近い位置づけとなる可能性がある。糟屋屯倉との関係も含め、今後の課題としておきたい。

最後に、今回対象とした地域で、前方後円墳の築造停止に時期差がある点と、円墳が多い点について、先行研究の中で体系的な分析を行っている下原幸裕氏の見解にもとづいて検討したい。研究史でも述べたように、下原氏は前方後円墳の築造停止のあり方について、大きく①～④類に分類している。その中で氏は、「第三四半期には前方後円墳が停止する③・④類〔筆者註・本稿 A 類にほぼ対応〕と、第四四半期まで継続して営む①・②類〔同・本稿 B 類〕との違いは、既に首長の「権威の象徴」としての意義を失いつつある墳形であっても最後まで採用しつづける場合（①・②類）と、衰退傾向にある状況に見切りをつけて造営することをやめた場合（③・④類）という違いだろう。したがって、早くに前方後円墳が営まれなくなる現象は畿内政権の側からの圧力や規制を要因とするのではなく、各地の首長層の側における意識の変化によって生じたのである。ただ、首長層の側に変化を生じさせた根本的要因は、畿内政権の側が打ち出した地域支配の政策や「威信財」の配布などに求められ、前方後円墳の衰退は結果的に自ら招いた現象ということもできる」と述べる（下原 2006：p.95）。また西日本では大王墓で 6 世紀後葉～末に大型前方後円墳から大型方墳（終末期方墳）へと変化することについて、「後期前方後円墳は畿内政権による地域支配の制度の施行による首長層の身分秩序化の進展によってその意義を失っていったのである。また天皇の場合でも衰退傾向を認識しながらも採用せざるを得ない状況にあったと考えられる。そうした矛盾を解消し、新たな墳形秩序

を打ち出し東アジア的な墓制へと発展させるという意味も込めて採られたのが終末期首長墳の方墳化であったと考えられる」「首長墳の変遷にみた四つの類型にあるとおり全ての地域で方墳化が認められるのではないが、畿内から九州に至るまで終末期方墳が存在することから方墳化の動きはかなり積極的に行われたと考えられる。終末期に方墳へ移行するのか円墳へ移行するのかという違いは、新たな墓制を受け入れるか否かというよりも、畿内政権との関わりの中で方墳築造を許されるか否かという点に求められると考える」（同：p.95）と論じている。また他方で、宗像地域において、終末期に方墳でなく円墳が採用されている点について、「宗像地域は宗像君氏の本拠地で、皇室にも娘を入れるなどの地位を築いているが、方墳が採用されないことは畿内との結び付きの強弱によって方墳か円墳かの相違が生じるのではないことを示しているといえよう」とも述べている（同：p.101）。

下原氏が指摘した大きく2つの見方、すなわち、前方後円墳の築造停止が、近畿地域からの圧力や規制ではなく、各地の首長層の側の意識の変化によるとする理解（「仮説Ⅰ」とする）と、終末期における方墳化が、近畿地域との関わりの中で方墳築造を許されるか否かに起因するとする理解（「仮説Ⅱ」とする）について考えると、本稿で対象とした福岡県西部地域に関しては、どちらもやや異なる理解が導かれる。下原氏の議論は西日本全体を対象として検討した上で類型化を試みたものであり、この点で本稿と対象地域および問題意識が異なるため、ここでの見解の違いはそうした点に起因するものであることを断っておきたいが、下原氏の仮説Ⅰに関しては、上述のように本稿のA類型とB類型の違いであり、A類型がミヤケの設置と関連しながら展開したことからすれば、前方後円墳の築造停止が早いのは、近畿とのつながりのもとで、辰巳和弘氏が「一定の規制（規格）」と述べたような性格付けが行われた可能性が想定される。他方のB類型については、最後の前方後円墳の段階でむしろ規模が最大化していることからすれば、在地の有力集団においては、その堅持がすくなく志向されたことを示唆している。

またそれとも関連するが、下原氏の仮説Ⅱについては、早良平野を除いて、

A・B（・C）類型のいずれにおいても、前方後円墳の築造停止後に大型円墳の築造に転換しており、明らかに円墳志向が認められる点については、下原氏が宗像地域について指摘しているように、近畿との結び付きの「強弱」というよりは、本稿で扱った福岡県西半部地域では円墳を築造することがより推奨されていたことを示唆している。これはすでにみたように壱岐古墳群でも同様である。こうした現象は北部九州でも終末期方墳が多数築造される周防灘沿岸地域などとは異なるあり方である。この円墳重視という点もまた、ミヤケが多数設置された本稿対象地域の政治的要因と結びついている可能性は高いと考えられる。逆にその中であって6世紀末から7世紀初頭前後に大型方墳が採用される早良平野は、近畿とのつながりのもとで方墳の築造が推奨された特殊な地域と位置づけられる。その理由は不明であるが、早良平野周辺については、古墳時代を通じて渡来系の要素がよいこととの関係などについても留意しておく必要がある。いずれにしても、福岡県西半部地域は円墳の築造によって特徴付けられるという点を再度確認しておきたい。

以上の点を踏まえてあらためて問題となるのは、特に博多湾沿岸地域におけるA1類型の背景として考えた「那津官家」や多数の群集墳の背後に、それらを統括する在地位層などが想定できるかどうかという点である。6世紀後半代以降における「那津官家」と北部九州の地域支配の問題については、「肥」「豊」といった地域の検討を踏まえてあらためて検討したい。

5. 結語

以上、本稿では、北部九州における前方後円墳の築造停止について、大きく3つの類型化を行った。これらのA類型～C類型に該当する諸地域は、特にどの地域が突出しているというわけでもなく、6世紀後半代にはそれらが全体として並立しているのが実情である。北部九州では、ミヤケが設置された地域が具体的な遺跡や文献史料の記録と対比可能であることから、それをふまえて検討を行った結果、A類型のような形で前方後円墳の築造停止が早い地域に関

しては、記録として残されたミヤケの設置と一定程度相関することを確認した。

本稿で対象とした、「筑前・筑後」に分割される前の「筑紫」にあたる福岡県西半部の地域に関して、上記のようなA～Cの3類型が認められる場合、各地の地域社会と相互の関係がどのような形で存在していたかが問題となる。より具体的には、文献史料でいうところの那津官家や糟屋屯倉、鎌屯倉や穂波屯倉といったミヤケ間の相互の関係であり、また「筑紫国造」や「筑紫君」の存在様態が問われる。研究史でも触れたように、例えば東日本では、首長墓造営地と大型前方後円墳の築造の先に国造級の被葬者を想定する立場（土生田2008）や、大型円墳・方墳への転換を国造任命の指標とする立場（白石2007；右島2011）など、いくつかの考え方があつた。また石母田正氏（1971）が指摘した、「大国造」と「小国造」の区分については、文献史学では前者のように令制国の範囲で国造が地域支配を行ったという見方に対して否定的な見解が多いのに対し（例：篠川1996・2021）、考古学の立場では、関東を対象として検討する場合には、この両者の区分が採用される場合がある（例：小森2017；若狭2017）。群馬県域において、「武蔵国造の乱」以降、七輿山古墳を最上位としていた体制が解体した後、「上毛野君」を最上位とし、大型前方後円墳から総社古墳群の方墳へという変遷に上野国造の被葬者像を見出すのはその具体例である（若狭2017・2019・2021）。「下野」地域を対象として終末期古墳と国造制との関係を検討した小森哲也氏が、「古墳研究が文献史料からは追えない国造制の内実について、大いに発言できる」（小森2017：p.332）と主張している点は、あらためて注意されよう。

こうした場合に、列島の東西で「武蔵国造の乱」と対比される「磐井の乱」後の北部九州について、磐井の子葛子が初代筑紫国造に任命されたとする理解や、あるいは糟屋屯倉や那津官家の修造、各地のミヤケ設置と地域支配のあり方を実態としてどう捉えるかといった問題（e.g. 酒井2018；田中2019）は、ミヤケ関連遺跡が具体的に検出されているという点においても、文献の記録と考古学的現象との関係の解明が期待される課題であるといえる（岩永2014；2022）。

本稿では、前方後円墳の築造停止の問題に焦点を当てて検討を行ったが、6・

7世紀史を考える上では、古墳の築造年代や墳丘・埋葬施設・副葬品からみた被葬者像、集落遺跡やミヤケ関連遺跡、また各種生産遺跡の調査成果について、より豊かな地域史および古代国家形成過程の脈絡に還元しつつ、具体的に説明することが求められる。その際にどのような手続きが必要であるのかは十分慎重に検討する必要がある。この点に留意しつつ引き続き検討を進めたいと考えている。

【謝辞】

本稿を執筆するにあたり、岩永省三先生、宮本一夫先生、溝口孝司先生をはじめとする九州大学の諸先生・諸氏には大変お世話になりました。記して厚く御礼申し上げます。本稿は、日本学術振興会科学研究費・基盤研究（C）「横穴式石室の三次元計測による6・7世紀の地域支配の実態解明：北部九州を中心に」（2020～2022年度）の成果によるものです。

【参考文献】

- 足達悠紀 2022a 「6・7世紀の須恵器編年考——北部九州を対象として——」『九州考古学』97.
- 足達悠紀 2022b 「律令国家形成期における須恵器生産体制：6世紀後半から8世紀初頭にかけての北部九州の諸窯跡群を対象に」『令和4年度九州考古学会総会研究発表資料集』九州考古学会.
- 甘粕健 1970 「武蔵国造の反乱」『古代の日本 7 関東』, 角川書店.
- 井浦一 2013 「第4章 総括」『津屋崎古墳群Ⅲ』, 福津市文化財調査報告書第7集.
- 池ノ上宏・花田勝広 1999 「筑紫・宮地岳古墳の再検討」『考古学雑誌』85-1.
- 石木秀啓 2012 「筑紫の須恵器生産と牛頸窯跡群」『古文化談叢』67.
- 石木秀啓 2019 「北部九州の須恵器生産と牛頸窯跡群」『鳥根県古代文化センター研究論集』第22集.
- 石母田正 1971 『日本の古代国家』, 岩波書店.
- 板楠和子 1991 「乱後の九州と大和政権」小田富士雄編『古代を考える 磐井の乱』, 吉川弘文館.
- 伊藤循 1999 「筑紫と武蔵」吉村武彦編『古代を考える 継体・欽明朝と仏教伝来』, 吉川弘文館.
- 井上辰雄 1970 『火の国』, 学生社.
- 井上義也 2004 「「断続ナデ技法」円筒埴輪をもつ古墳の性格」『福岡大学考古学論集——小田富士雄先生退職記念——』, 小田富士雄先生退職記念事業会.
- 岩永省三 2003 「古墳時代親族構造論と古代国家形成過程」『九州大学総合研究博物館研究

報告』1.

- 岩永省三 2012 「第2分科会 ミヤケ制・国造制の成立——磐井の乱と6世紀の諸変革——主旨説明」『日本考古学協会2012年度福岡大会 研究発表資料集』, 日本考古学協会2012年度福岡大会実行委員会.
- 岩永省三 2014 「ミヤケの考古学的研究のための予備的検討」高倉洋彰編『東アジア古文化論叢2』, 高倉洋彰先生退職記念論集刊行会.
- 岩永省三 2022 『古代国家形成過程論——理論・針路・考古学——』, すいれん舎.
- 上田龍児 2018 「大宰府成立前後における地域社会の変革——福岡県大野城市乙金地区遺跡群の事例から——」『大宰府の研究』, 大宰府史跡発掘50周年記念論文集刊行会.
- 上田龍児 2022 「集落・墳墓の動態からみた古墳時代後期の博多湾沿岸地域」『集落と古墳の動態Ⅲ——古墳時代中期末～古墳時代後期——』, 九州前方後円墳研究会.
- 上野祥史編 2022 『金鈴塚古墳と古墳時代社会の終焉』, 六一書房.
- 宇野慎敏 2015 「「大抜屯倉」その後」『河上邦彦先生古稀記念献呈論文集』, 河上邦彦先生古稀記念会.
- 瓜生秀文 2001 「古代の御笠——地区全国御笠郡一帯への移住について——」『筑紫野市史資料編(上)』, 筑紫野市.
- 大川原竜一 2009 「国造制の成立とその歴史的背景」『駿台史学』137.
- 大川原竜一 2017 「国造と伴造についての基本的考察——「造」の本質から——」篠川賢・大川原竜一・鈴木正信編『国造制・部民制の研究』, 八木書店.
- 太田宏明 2016 『横穴式石室と古墳時代社会——遺構分析の方法と実践——』, 雄山閣.
- 岡田裕之 2003 「北部九州における須恵器生産の動向——牛頸窯跡群の検討を中心として——」『古文化談叢』49.
- 岡田裕之 2006 「古墳時代後期社会と須恵器生産・屯倉制——博多湾周辺地域を対象として——」『東アジアと日本——交流と変容——』3.
- 岡田裕之 2007 「須恵器生産からみた九州古墳時代社会——北部九州を中心として——」『西健一郎先生退官記念論集』, 西健一郎先生退官記念事業実行委員会.
- 小田富士雄 1997 「筑前国志麻(嶋)郡の古墳文化——福岡市元岡所在古墳群の歴史的評価——」『古文化談叢』39.
- 小田富士雄 2003 「「糟屋屯倉」遺跡の発見とその意義」『新世紀の考古学』, 大塚初重先生喜寿記念論文集刊行会.
- 小田富士雄 2012 「古墳時代の北部九州と壱岐島・序説」『巨大古墳の時代 東アジアにおける壱岐古墳群の位置』, 壱岐市教育委員会.
- 小田富士雄 2021 「国史跡「壱岐古墳群」と「壱岐嶋造」」『古文化談叢』87.
- 甲斐孝司 2004 「鹿部田淵遺跡の官衙的大型建物群」『福岡大学考古学論集——小田富士雄先生退職記念——』, 小田富士雄先生退職記念事業会.
- 甲斐孝司・岩橋由季 2019 『豪華な馬具と朝鮮半島との交流 船原古墳』, 新泉社.
- 片岡宏二 2000a 「古代の点と線——筑紫平野の郡(評)衙の位置を決める法則」『古文化談

叢』44.

- 片岡宏二 2000b 「続・古代の点と線——筑紫平野の国・郡境を決める法則」『古文化談叢』45.
- 加藤謙吉 2017 「磐井の乱」前後における筑紫君と火君——西海道地域の首長層の動向と対外交渉——」篠川賢・大川原竜一・鈴木正信編『国造制・部民制の研究』, 八木書店.
- 鎌田元一 2001 『律令公民制の研究』, 塙書房.
- 亀井輝一郎 1991 「磐井の乱の前後」『新版 古代の日本 3 九州・沖縄』, 角川書店.
- 亀井輝一郎 2012 「ヤマト王権の九州支配」『日本考古学協会2012年度福岡大会 研究発表資料集』, 日本考古学協会2012年度福岡大会実行委員会.
- 亀田修一 2008 「吉備と大和」土生田純之編『古墳時代の実像』, 吉川弘文館.
- 川尻秋生 2022 「国造の世界」『シリーズ地域の古代日本 東国と信越』, 角川選書.
- 菊地芳朗 2010 『古墳時代史の展開と東北社会』, 大阪大学出版会.
- 木本雅康 2009 「筑後国御原郡の郡界と筑後・肥前国境について」『古代地方行政単位の成立と在地社会』, 奈良文化財研究所.
- 熊谷公男 2001 『日本の歴史03 大王から天皇へ』, 講談社.
- 岸本直文 2011 「横穴式石室の型式は被葬者の活躍期を示す」『考古学研究』58-1.
- 久住猛雄・宮元香織 2010 「筑前地方における首長墓系列の再検討」『九州における首長墓系列の再検討』, 九州前方後円墳研究会.
- 蔵富士寛 2009 「九州地域の横穴式石室」杉井健編『九州系横穴式石室の伝播と拡散』, 北九州中国書店.
- 蔵富士寛・橋本達也 2011 「九州」広瀬和雄・和田晴吾編『講座日本の考古学 7 古墳時代(上)』, 青木書店.
- 蔵富士寛 2020 「複室構造横穴式石室」土生田純之編『横穴式石室の研究』, 同成社.
- 小嶋篤 2011 「筑前の鉄釘出土古墳」『古文化談叢』65 (3).
- 小嶋篤 2012 「墓制と領域——胸肩君一族の足跡——」『九州歴史資料館論集』37.
- 小嶋篤 2016 『大宰府の軍備に関する考古学的研究』, 九州国立博物館・福岡県立アジア文化交流センター.
- 小嶋篤 2018 「「前方後円墳の終焉」から見た胸肩君」『沖ノ島研究』4.
- 小嶋篤 2022 「遠賀川流域の古墳と集落——造墓秩序と生活圏——」『集落と古墳の動態Ⅲ——古墳時代中期末～古墳時代後期——』, 九州前方後円墳研究会.
- 古代学研究会編 1984a～e 「特集 各地域における最後の前方後円墳」(西日本Ⅰ～Ⅲ, 東日本Ⅰ・Ⅱ)『古代学研究』102～106.
- 小森哲也 2017 「東北・関東地方における主要古墳群の動向と国造制」篠川賢・大川原竜一・鈴木正信編『国造制・部民制の研究』, 八木書店.
- 近藤義郎 1983 『前方後円墳の時代』, 岩波書店.
- 齊藤大輔 2014 『古墳時代の地域間交流2』, 九州前方後円墳研究会.
- 齊藤大輔 2019 「古墳時代後・終末期における武装具保有の実態」『九州考古学』94号.

- 斎藤忠 1958 「国造に関する考古学上よりの一試論」古代史談話会編『古墳とその時代(二)』, 朝倉書店.
- 酒井芳司 2008 「那津官家修造記事の再検討」『日本歴史』725.
- 酒井芳司 2009 「倭王権の九州支配と筑紫大宰の覇権」『九州歴史資料館論集』34.
- 酒井芳司 2018 「筑紫国造と評の成立」『大宰府の研究』, 大宰府史跡発掘50周年記念論文集刊行会.
- 坂上康俊 2019 「大宝二年筑前国嶋郡川辺里戸籍の故地」『史淵』156.
- 笹川進二郎 1985 「「糟屋屯倉」献上の政治史的考察——ミヤケ論研究序説——」『歴史学研究』546.
- 笹川進二郎 2021
- 重藤輝行 2007 「福岡県内の首長墓系列」『西健一郎先生退官記念論集』, 西健一郎先生退官記念事業実行委員会.
- 重藤輝行 2008 「玄界灘沿岸地域の後期古墳」『後期古墳の再検討』, 九州前方後円墳研究会.
- 重藤輝行 2009 「古墳時代中・後期の筑前・筑後の土師器」『地域の考古学』, 佐田茂先生論文集刊行会.
- 重藤輝行 2010 「筑前・筑後の首長墓系譜」『九州における首長墓系譜の再検討』, 九州前方後円墳研究会.
- 重藤輝行 2011 「宗像地域における古墳時代首長の対外交渉と沖ノ島祭祀」『宗像・沖ノ島と関連遺産群』研究報告』1.
- 重藤輝行 2018 「西海道のヤケと倉——九州北部の首長・豪族居館を例として——」『大宰府の研究』, 大宰府史跡発掘50周年記念論文集刊行会.
- 重藤輝行 2020 「九州における横穴式石室の展開——編年・地域性・階層性の概観——」土生田純之編『横穴式石室の研究』, 同成社.
- 篠川賢 1985 『国造制の成立と展開』, 吉川弘文館.
- 篠川賢 1996 『日本古代国造制の研究』, 吉川弘文館.
- 篠川賢 2021 『国造』, 中公新書.
- 篠川賢・大川原竜一・鈴木正信編『国造制・部民制の研究』, 八木書店.
- 嶋田光一 1991 「福岡県榑山古墳の再検討」『古文化論叢』, 児島隆人先生喜寿記念事業会.
- 嶋田光一 2015 「遠賀川上流域における古墳時代遺跡の変遷と近年の成果」辻田淳一郎編『山の神古墳の研究——「雄略朝」期前後における地域社会と人制に関する考古学的研究: 北部九州を中心に——』, 九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室.
- 城倉正祥 2011 「武蔵国造争乱——研究の現状と課題——」『史観』165.
- 城倉正祥 2022 「龍角寺の調査研究史とⅡ期調査の成果」『下総龍角寺再考——最新の発掘調査から——早稲田文化芸術週間2022 下総龍角寺展関連シンポジウム予稿集』.
- 下原幸裕 2006 『西日本の終末期古墳』, 中国書店.
- 白井久美子 2016 『最後の前方後円墳 龍角寺浅間山古墳』, 新泉社.
- 白石太一郎 1982 「畿内における古墳の終末」『国立歴史民俗博物館研究報告』第1集.

- 白石太一郎 1991 「常陸の後期・終末期古墳と風土記建評記事」『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集。
- 白石太一郎編 2005 『古代を考える 終末期古墳と古代国家』, 吉川弘文館。
- 白石太一郎 2007 『東国の古墳と古代史』, 学生社。
- 菅波正人 1996 「那津の口の大型建物群について——福岡市比恵, 那珂遺跡群の6世紀～7世紀の様相——」『博多研究会誌』4。
- 菅波正人 2012 「博多湾岸のミヤケ関連遺跡」『日本考古学協会2012年度福岡大会 研究発表資料集』, 日本考古学協会2012年度福岡大会実行委員会。
- 菅波正人 2013 「律令成り立前期の福岡」『新修福岡市史特別編 自然と遺跡からみた福岡の歴史』, 福岡市。
- 鈴木一有 2019 「東海地方における古墳時代後期の地域社会」鈴木一有・田村隆太郎編『賤機山古墳と東国首長』, 雄山閣。
- 鈴木一有 2021 「船原古墳1号土坑出土遺物からみる東国社会」『令和3年度 国史跡船原古墳講演会史料集』, 古賀市教育委員会。
- 鈴木一有・田村隆太郎編 2019 『賤機山古墳と東国首長』, 雄山閣。
- 高橋照彦 2004 「畿内最後の大型前方後円墳に関する一試論——見瀬丸山古墳と欽明陵古墳の被葬者——」福永伸哉編『西日本における前方後円墳消滅過程の比較研究』, 大阪大学大学院文学研究科。
- 辰巳和弘 1984 「静岡県」『古代学研究』105。
- 館野和己 1978 「屯倉制の成立——その本質と時期——」『日本史研究』190。
- 館野和己 1999 「ミヤケと国造」吉村武彦編『古代を考える 継体・欽明朝と仏教伝来』, 吉川弘文館。
- 館野和己 2004 「ヤマト王権の列島支配」『日本史講座第1巻 東アジアにおける国家の形成』, 東京大学出版会。
- 館野和己 2012 「ミヤケ制研究の現在」『日本考古学協会2012年度福岡大会 研究発表資料集』, 日本考古学協会2012年度福岡大会実行委員会。
- 田中聡一 2007 「壱岐島の古墳」『西海考古』7。
- 田中聡一 2012 「壱岐島における後・終末期古墳の動向」細井浩志編『古代壱岐島の世界』, 高志書院。
- 田中史生 2018 「磐井の乱前後の北部九州と倭王権」新川登亀男編『日本古代史の方法と意義』, 勉誠出版。
- 田中史生 2019 『渡来人と帰化人』, 角川選書。
- 田中良之 1995 『古墳時代親族構造の研究』, 柏書房。
- 田村悟 2009 「群集墳」『終末期古墳の再検討』, 九州前方後円墳研究会。
- 長直信 2009 「九州島における7世紀の須恵器——九州北部急変の土器様相とその併行関係——」『終末期古墳の再検討』, 九州前方後円墳研究会。
- 長直信 2021 「古国府遺跡群の再検討——7世紀以前を中心に——」『大分県地方史』243。

- 長直信 2022 「豊後における中期末から後期の集落と墳墓——大分平野の様相を中心に——」
『集落と古墳の動態Ⅲ——古墳時代中期末～古墳時代後期——』,九州前方後円墳研究会.
- 辻田淳一郎 2011 「博多湾沿岸地域の古墳時代後期社会——小戸1号墳の調査成果から——」
『新修福岡市史 資料編 考古3』,福岡市.
- 辻田淳一郎 2012 「雄略朝から磐井の乱に至る諸変動」『日本考古学協会2012年度福岡大会
研究発表資料集』,日本考古学協会2012年度福岡大会実行委員会.
- 辻田淳一郎 2013 「古墳時代の集落と那津官家」『新修福岡市史 特別編 自然と遺跡からみた
福岡の歴史』,福岡市.
- 辻田淳一郎編 2015 『山の神古墳の研究——「雄略朝」期前後における地域社会と人制に関
する考古学的研究:北部九州を中心に——』,九州大学大学院人文科学研究院考古学研究
室.
- 辻田淳一郎 2022 「古墳時代の威信財授受と親族関係」『日本考古学協会2022年度福岡大会
研究発表資料集』,日本考古学協会2022年度福岡大会実行委員会.
- 辻田淳一郎・齊藤希・福永将大 2018 「妙泉寺古墳群・鬼の窟古墳の発掘調査」宮本一夫編
『壱岐原の辻間線遺跡・妙泉寺古墳群・鬼の窟古墳』,九州大学大学院人文科学研究院考
古学研究室.
- 都出比呂志 1988 「古墳時代首長系譜の継続と断絶」『待兼山論叢』22,史学篇.
- 都出比呂志 1991 「日本古代の国家形成論序説——前方後円墳体制の提唱——」『日本史研
究』343.
- 津曲大祐 2004 「博多湾沿岸地域の石室構築技術——後期古墳を中心に——」『福岡大学考古
学論集——小田富士雄先生退職記念——』,小田富士雄先生退職記念事業会.
- 豊島直博 2018 「日本における鉄製武器の生産・流通と国家権力の形成」『考古学研究』65-2.
- 新納泉 1983 「裝飾付大刀と古墳時代後期の兵制」『考古学研究』30-3.
- 新納泉 2005 「西国の終末期古墳」白石太一郎編『古代を考える 終末期古墳と古代国家』,
吉川弘文館.
- 西垣彰博 2018 「総括」『阿恵遺跡』,粕屋町文化財調査報告書第43集.
- 仁藤敦史 2009 「古代王権と「後期ミヤケ」」『国立歴史民俗博物館研究報告』152集.
- 土生田純之 1999 「最後の前方後円墳——古墳時代の転機——」吉村武彦編『古代を考える
継体・欽明朝と仏教伝来』,吉川弘文館.
- 土生田純之 2008 「終章 古墳時代の実像」『古墳時代の実像』,吉川弘文館.
- 土生田純之 2012 「墳丘の特徴と評価」『馬越長火塚古墳群』,豊橋市埋蔵文化財調査報告書
第120集.
- 菱田哲郎 2005 「須恵器の生産者——5世紀から8世紀の社会と須恵器工人——」『列島の古
代史4 人と物の移動』,岩波書店.
- 菱田哲郎 2007 『古代日本 国家形成の考古学』,京都大学学術出版会.
- 菱田哲郎 2019 「地域の開発と後期古墳——プレ律令国家期の地域社会の形成——」『鳥根県
古代文化センター研究論集』第22集.

- 菱田哲郎 2020 「大型横穴式石室と交通」土生田純之編『横穴式石室の研究』, 同成社。
- 広瀬和雄 2010 「沓岐島の後・終末期古墳の歴史的意義——6・7世紀の外交と『国境』——」『国立歴史民俗博物館研究報告』158。
- 広瀬和雄・太田博之編 2011 『前方後円墳の終焉』, 雄山閣。
- 福永伸哉編 2004 『西日本における前方後円墳消滅過程の比較研究』, 大阪大学大学院文学研究科。
- 藤田憲司 1999 『こうもり塚古墳と江崎古墳』, 吉備人出版。
- 堀江潔 2010 「伊吉史氏と古代沓岐島」『古代文化』61-4。
- 堀江潔 2012 「沓岐島の国造について」細井浩志編『古代沓岐島の世界』, 高志書院。
- 細井浩志編 2012 『古代沓岐島の世界』, 高志書院。
- 埋蔵文化財研究会編 1998 『前方後円墳の終焉』, 埋蔵文化財研究会。
- 丸山雍成 1997 「筑前国川辺里の比定地をめぐる問題」『日本歴史』605。
- 右島和夫 1994 『東国古墳時代の研究』, 学生社。
- 右島和夫 2011 「古墳時代の毛野・上毛野・下毛野を考える」右島和夫・若狭徹・内山敏行編『古墳時代毛野の実像』, 雄山閣。
- 松浦宇哲 2005 「福岡県王塚古墳の出現にみる地域間交流の変容」『待兼山考古学論集』, 大阪大学考古学友の会。
- 松浦宇哲 2014 「『筑豊』のミヤケと渡来文化」『6世紀の九州島 ミヤケと渡来人 記録集』, 嘉麻市教育委員会。
- 松尾充晶 2005 「総括：装飾付大刀と地域社会の首長権構造」『装飾付大刀と後期古墳——出雲・上野・東海地域の比較研究——』, 鳥根県古代文化センター調査研究報告書31。
- 桃崎祐輔 2010 「九州の屯倉研究入門」『還暦, 還暦? 還暦! ——武末純一先生還暦記念献呈文集・研究集——』, 武末純一先生還暦記念事業会。
- 桃崎祐輔 2012 「九州の屯倉研究序説」『日本考古学協会2012年度福岡大会 研究発表資料集』, 日本考古学協会2012年度福岡大会実行委員会。
- 桃崎祐輔 2019a 「北部九州の屯倉設置と首長権の消長」『鳥根県古代文化センター研究論集』第22集。
- 桃崎祐輔 2019b 「額田部の馬具と鈴——心葉形十字文透鏡板付轡と虎頭鈴・多角形鈴めぐって——」『鳥根県古代文化センター研究論集』第22集。
- 森公章 2014 「国造制と屯倉制」『岩波講座日本歴史2 古代1』, 岩波書店。
- 森浩一・和田萃・櫃本誠一・辰巳和弘 1984 「座談会 前方後円墳の終末」『古代学研究』106。
- 八木充 1986 「筑紫大宰とその官制」『日本古代政治組織の研究』, 塙書房。
- 柳沢一男 1975 「北部九州における初期横穴式石室の展開——平面図形と尺度について——」『九州考古学の諸問題』, 東出版。
- 柳沢一男 1987 「福岡市比恵遺跡の官衙的建物群」『日本歴史』465。
- 柳沢一男 1992 「筑前」近藤義郎編『前方後円墳集成九州編』, 山川出版社。
- 柳沢一男 2004 『描かれた黄泉の世界 王塚古墳』, 新泉社。

- 柳沢一男 2014 『筑紫君磐井と「磐井の乱」岩戸山古墳』, 新泉社.
- 山尾幸久 1977 『日本国家の形成』, 岩波新書.
- 山尾幸久 1999 『筑紫君磐井の戦争』, 新日本出版社.
- 吉田晶 1973 『日本古代国家成立史論』, 東京大学出版会.
- 吉田晶 2005 『古代日本の国家形成』, 新日本出版社.
- 吉村武彦 2006 「ヤマト王権と律令制国家の形成」『列島の古代史八 古代史の流れ』, 岩波書店.
- 吉村武彦 2010 『シリーズ日本古代史② ヤマト王権』, 岩波新書.
- 吉村靖徳 2000 「北部九州における三室構造横穴式石室の諸相」『古文化談叢』45.
- 米倉秀紀 1993 「那津官家? — 博多湾岸における三本柱柵と大型総柱建物群 —」『福岡市博物館研究紀要』3.
- 米倉秀紀 2003 「筑前におけるミヤケ状遺構の成立」『先史学・考古学論究IV』, 龍田考古会.
- 若狭徹 2016 『古代の東国1 前方後円墳と東国社会』, 吉川弘文館.
- 若狭徹 2019 「東国首長の地域経営と装飾付大刀の意義」『刀剣が語る古代国家誕生』, 古代歴史文化講演会資料集.
- 若狭徹 2021 『古墳時代東国の地域経営』, 吉川弘文館.
- 渡邊正氣 1994 「牛頸須恵器生産の開始と終末」『平成六年度九州史学会大会公開講演・研究発表要旨』, 九州史学会.